新版 古典文法

——ひとり学び——

影山美知子

新版 古典文法

——ひとり学び——

影山美知子

明治書院

新版古典文法―ひとり学び―　定価 五八〇円

昭和六〇年二月一五日 印刷
昭和六〇年二月二〇日 発行

編著者© 影山美知子
発行者 明治書院 代表 三樹彰
印刷者 大日本法令印刷 代表 田中忠

発行所 株式会社 明治書院
東京都千代田区神田錦町一―一六
電話 二九二―三七四一(代)
振替 東京 三―四九九一

大日本法令印刷 製本

7081-20418-8305

はじめに——高校生のみなさんに——

古典文法に限らず、文法に対して、みなさんは「むつかしい。」とか、「きらいだ」とかいう先入観をもってはいませんか。「こんど文法をやることになったよ」といった時、お母さんが、「文法はむつかしいからね。しっかりやるのよ」といいませんでしたか。もしかするとお父さんが、「文法なんてどうってことない。暗記すりゃいいんだから」といったかもしれません。でも、それは、実をいうと、どちらのいい方も、ちょっと具合が悪いのです。たしかに文法というと「むつかしい」「きらいだ」あるいは「多少むつかしいけれど暗記してしまえばいいんだ」という人が多いのですが、実は、文法はそうやたらにむつかしいわけでもないし、また、暗記すればいいというものでもないのです。もう少し正確にいうと、暗記しようとしてはいけない、というべきかもしれません。無理に暗記したものは、テストが済めば、ケロリと忘れてしまいます。もう少し歩留まりよく考えても、古文を読んでいる間くらいは何とか覚えていても、古文を読まなくなったら忽ち忘れてしまうということになるのではないかと思います。それでは、せっかくの努力が、結局のところ実りのないものになってしまいますね。

文法はむつかしい、むつかしくてわからないから考えるのはやめて暗記しよう、というやり方がだめだとすれば、どうしたらいいのか。

それは、いくらむつかしいといっても、必ずわかるはずなのだ、だから自分が納得の行くまで考えてみよう、とすることです。「文法はむつかしい」という先入観は困る、と今いいましたが、たしかに、文法の教科書を見ますと、何やら堅くてむつかしそうで、読む気が起こらないものが多いのです。字は小さいし、目次を見ただけでも盛りだくさんに、いろいろなことが書かれているようで、どこに重点をおいて読んだら、少しはメドがつくのか、とウンザリすることでしょう。それは、体系的に書かれた文法の本に、つきものの重くるしさなのです。

この本は、「ひとりで文法を学ぶ」、気楽に、できれば楽しく、読んでもらうことを第一のねらいとしています。なるべく、むつかしい言葉は避け、ポイントをしぼって、丁寧に分かり易く話を進めるつもりでいます。とはいえ、文法特有の用語が出てくることは避けられません。そういう用語の意味についても、できるだけ説明を加えるつもりです。

いったい、何かを初めて学ぼうとする時は、誰でも好奇心から、かなり熱心にそのことに取り組むものです。それは古文の勉強についてもいえることでしょう。ところが、初めは熱心にやっていたものが、思ったほどに成果が上がらないとか、何か

むつかしいことにぶつかったりするとか、いろいろな事情から、時がたつにつれ、だんだんいやになってくることがあります。そうして、ある人々は、その段階であきらめてしまって、もうだめだ、自分の力はこれ位なんだ、と思いこんで、投げてしまうことがあります。しかし、みなさんも自分の経験をふりかえってみれば、すぐにわかることですが、物事は、初めからたやすくできることができた時よりも、何か困難があるのを乗り越えて、それができるようになった時の方が、はるかにうれしいものですね。わからなかったことが、自分の力でわかるようになるということは、人間にとって、本来楽しいことなのです。そういう楽しさを知っている人は、たとえ現在の見かけはどうあろうとも、本当の意味での勉強ぎらいではないはずなのです。

努力すれば、その努力に見合う位の成果が得られる、ということになれば、誰でも努力することをいやがらないでしょう。勉強においても同じです。ところで、努力する、ということは、勉強の場合、いったいどういうことをすることなのでしょうか。机の前に本をひろげて活字の上に目を走らせるということでしょうか。そうではありますまい。勉強における努力とは、何よりもまず、考えることだといえましょう。自分の頭で考えようとしないで本を読んでいても、おそらく本の内容はつかみきれないはずです。では、考えるとは、どのようにすることなのでしょうか。考えることは、内容を理解することだ、という人がいるかもしれませんが、私に言わせれば、内容をいきなりわかろうとするのはあまり上手な考え方ではありません。なぜなら、考え方の基盤も違えば、知識の程度も違う人の書いたものを、こちらがいくら熱心に読んで分かろうとしても、そう簡単にわかるはずがないのですから。むしろ、一々わからないところを意識し、なぜそうなるのか、どうしてこの著者はこのように考えるのだろう、と疑問をもつのがあたりまえでしょう。そのように、自分の立っている場所から見て、わからないことは、はっきりわからないと考え、疑問をあれこれと持たなければ、本当の意味で相手を理解することはできないのです。これはどういうことだろう、とか、なぜこのようになるのだろうとかいう疑問をもって読み進めていき、自分でいろいろ考えめぐらし、その結果「なるほど」と納得できたとき、はじめてものごとが理解できたといえるのです。このようにして、初めは自分にはとても手が届きそうになかったむつかしいことが、自分の力でわかった時の満足の大きさは、もっとむつかしい問題にいどむ意欲をかきたてるのに十分なものだと思います。

文法がむつかしくない、などというのは、正直なところ、無責任ないい方だと思います。言葉のきまりというのは、考えれば考えるほど、途方もなくむつかしいところがあるのです。それは高校生が学ぶ程度のものにしてもやはりむつかしいということでもあります。しかし、そのようなむつかしさも、この勉強を何のためにやるのか、という目的をもち、学んでいく過程で少しずつでもわかるということになればがまんができるというものでしょう。では、何のために古典文法を学ぶのか。私は、ここではそれを「古文をより正確によむために」と考えたいと思います。ですから、あらゆる事柄を体系的に書くのではなく、辞書を能率的に、有効に使うことができるために、最少限必要

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

な事柄に限定して筆を進めたいと思います。

言葉は生きています。絶えず変化しています。短い時間の中では気がつかないことですが、その変化が積もり積もって長い時間がたつと、もとの言葉と後の言葉とは非常に大きく違ってくるものです。時代の移り変わりの中で、あまり使われなくなって滅びて行ってしまう言葉があり、また、新しく生まれて定着してくる言葉があります。現代の私達の言葉から見ると、古語は非常にむつかしく見えるのですが、実はこれとても、古語から現代語へ、飛躍的に、一挙に変わったのではないのです。現代の言葉を一方の座標において、言葉が、どこからどのような経過をとってこの座標にいたったのかと考えることで、古語というものの位置が明らかになってくるのです。そこで、この本では、現代語の知識を大いに活用し、それとの対比において、古語の性質を考えるという方法を、それができる面については、できるだけとって行きたいと思います。

このようにいうと、せっかちな人は、「口語文法だって！中学の時イヤイヤやったからよくおぼえていないよ」「やっと口語文法と縁が切れたと思ったのに、またおつきあいか、ウンザリだな」と思うかもしれませんが、口語文法の知識があいまいであろうが、ウロおぼえであろうが、びくびくすることはありません。その、あいまいだった口語文法の知識も、文語文法と対比することで、はっきりしたものになる可能性があるのですから、いわば、一石二鳥の効果も期待できると、前向きに考えたほうがトクです。

とはいえ、口語文法との対比が十分にできない場合があります。助動詞の場合がそれです。現代語の助動詞と古語の助動詞をそのままの形で比較することはほとんど無意味に近いのです。ということは、古文を読む時に一番むつかしいのが、この助動詞だということです。そこで、この本では、助動詞にねらいを定めて、古語の助動詞がどんな働きをしているのかを丁寧に説明したいと思います。しかし、助動詞はほとんどの場合、動詞・形容詞・形容動詞といった用言と一緒に使われているので、助動詞の話をするためには、どうしても用言についてふれないわけにはいきません。また、助詞では、現代語と同じような働きのものも多くありますが、古語特有の助詞というものがあり、それが古文を読む場合の困難点になっていることもたしかですから、そのような、古語に特有な助詞については、やはり軽くでもふれたいと思います。更に、古語特有の語法についても、いくつかのよく出てくるものについては途中でふれながら進める予定です。また、文語文法を学ぶ目的を「古文をより正確に読むため」と限定したわけですから、説明のための用例はできるだけ、学校の教材に多く使われそうな文章からとることにしました。

みなさんがこの本を読みながら、私と一緒に、言葉について考え、その結果、言葉のしくみのおもしろさを発見し、あるいは古文を読む楽しさを実感して下されば、こんなうれしいことはありません。ものを考えることの楽しさを知るということこそ、本当の意味で「勉強の力がつく」ということだと、私は考えています。

〈受験の秘訣　五ケ条〉

一、先生・参考書（本書を含む）・問題集の答えをカンタンに信用しないこと。

二、先生が言うこと、本に書いてあることは、必ず自分の手で書いたり要約したりして、そのアラを探すこと。

三、紙と鉛筆を惜しまないこと。

四、「急がば回れ」トレーニング式のものばかりやらないで、じっくり本筋を考えること。

五、自分は忘れっぽい人間だということを決して忘れないこと。

目次

はじめに……一
動詞……一
活用の種類……一
仮名遣いの違い―発音の変化……二
四段活用……六
下一段活用……一〇
ナ行変格活用……一一
ラ行変格活用……一三
活用形の名称と用法……一四
語幹と語尾……一六
上一段活用・上二段活用……一七
下二段活用……二〇
カ行変格活用……二四
サ行変格活用……二四
自動詞と他動詞……二三
音便……二四

形容詞……三六
ク活用・シク活用……三六
補助活用……三八
語幹の用法……四四
感情と状態……四五
動詞と形容詞……四八
形容動詞……五三
助動詞……五八
自発と使役（る・らる）（す・さす）……六〇
存続と完了（り・たり）（ぬ・つ）……七三
打消（ず）……八二
適当と適当の打消（べし）（まじ）……八四
推量と推量の打消（む・らむ・けむ）（じ）……九二
推定（めり・なり・らし）……一〇二
反実仮想（まし）……一〇六
回想（き・けり）……一〇九
希求（まほし）……一一四
指定（断定）（なり）……一一五

比況（ごとし）……一二九
敬語法……一三六
敬語の種類……一三七
おはす・おはします……一三九
侍り・さぶらふ……一三九
たまふ（四段）・奉る・たまはる・たまふ（下二段）……一四一
のたまふ・仰す・きこゆ・申す……一四四
まゐる・まかる・まゐらす……一四六
めす・おぼしめす・きこしめす・しろしめす……一四八
大殿ごもる……一四九
二方面敬語……一四九
助詞……一五九
助詞の分類と相関……一五九
が・の・もののの……一六二
に・を・ものを……一七二
へ・と・など・とも・ども・ど……一七六
より・から・ながら・ものから……一七九
まで・ばかり・のみ……一八三
すら・だに・さへ……一八五

し・しも……一九二
は・ば・ばや……一九二
も・もが・もがも・もがな……一九八
ぞ・なむ……二〇〇
や・やは・やも・よ……二〇一
か・かは・かな・かも……二〇三
こそ……二〇三
て・して・にて・で・つつ……二〇四
かし……二〇七
な……二〇八
ね・な・なむ……二〇八
係り結び……二一〇
自立語で活用しない品詞……二二五
名　詞……二二五
副　詞……二二六
連体詞……二二八
接続詞……二二八
感動詞……二二九
文の構造……二三〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

動詞

〈活用の種類〉

口語文法では活用の種類は、五段活用・上一段活用・下一段活用・カ行変格活用・サ行変格活用ですが、文語文法の場合は更に四種類ふえて、上二段活用・下二段活用・ナ行変格活用・ラ行変格活用が加わり九種類になります。口語と文語の活用の種類の関係をまとめると下の表のようになります。

口語で五段活用といっているものは、仮名遣いの関係で文語では四段活用になります。そして、現在は五段活用に属している「死ぬ」「ある」「蹴る」が、それぞれ違う活用をしていたわけです。また、現在上一段活用といっているものは文語の場合は二種類にわかれ

○＝口語にはあって文語にはない印

口語		文語	
活用の種類	例語	活用の種類	例語
五段	読む 笑う	四段	読む 笑ふ
	蹴る	下一段	蹴る
	死ぬ	ナ行変格	死ぬ
	ある	ラ行変格	あり
上一段	見る 着る	上一段	見る 着る
	落ちる 過ぎる	上二段	落つ 過ぐ
下一段	定める 消える	下二段	定む 消ゆ
カ行変格	来る	カ行変格	来○
サ行変格	する	サ行変格	す○

ていて、上一段活用と上二段活用になります。この二段活用というのは口語にはないもので、文語特有の形ですから、よく注意して下さい。口語の下一段活用に属するものは、文語では下二段に活用します。

〈仮名遣いの違い—発音の変化〉

仮名遣いの関係で五段は四段になる、とさっきいいましたが、口語の仮名遣いと文語の仮名遣ひとでは、かなり違うところがあります。たとえば、下のようです。

なぜこのように違うかといえば、もともと、仮名というのは発音を忠実に写したものであるはずですから、書いた字をそのまま発音すれば、正確に読めていたことになるはずなのです。と

例語	口語	文語
恋	こい	こひ
遠い	とおい	とほい
居る	いる	ゐる
田植	たうえ	たうゑ
恥	はじ	はぢ
屑	くず	くづ

行／段	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ	
ア	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ	ん
イ	い	き	し	ち	に	ひ	み	い	り	ゐ	
ウ	う	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る	う	
エ	え	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ	ゑ	
オ	お	こ	そ	と	の	ほ	も	よ	ろ	を	

行／段		ガ	ザ	ダ		バ					
ア		が	ざ	だ		ば					
イ		ぎ	じ	ぢ		び					
ウ		ぐ	ず	づ		ぶ					
エ		げ	ぜ	で		べ					
オ		ご	ぞ	ど		ぼ					

ところが、表記法はもとのままで発音だけが変わってきてしまったという事情があるのです。それを、発音と表記があまりに違うのは不便ではないかというので、新しく、発音に近い形に表記を改めました。これが現在の口語の仮名遣いですが、文語では、もともとの発音のまま表記されている。それで、現在の私達が読むと、表記とは違った発音をしなければならないということもあるわけです。

発音が違ってしまったのに表記だけがもとのままである、ということから問題になるのは、ハ行の音、ヤ行のい、え、ワ行のゐ、う、ゑ、ダ行のぢ、づです。この中、ヤ行のい、え、ワ行のゐ、う、ゑはそれぞれ、ア行のその段の音と同じになってしまいました。また、ダ行のぢ、づは現在ではザ行のじ、ずと発音としては変わらなくなってしまっています。しかし昔の人は、これらを発音しわけていました。現在、東京あたりではこの発音をしわける人はいませんが、地方に行きますと、まだダ行のぢ、づとザ行のじ、ずを発音しわけ、また、耳で聞きわけることができる人達がいるようです。しかし一般には、それらの発音をしわけたり、聞きわけたりするということは現在ではありません。だから、現在の仮名遣いでは、ダ行のぢ、づはザ行のじ、ず、ヤ行のい、え、ワ行のゐ、う、ゑは、ア行のい、う、えを使って書いているわけですが、実は昔の人は、これらを発音しわけ、聞きわけていたのですから、昔の人の書いた文章には、それらの字がきちんと使いわけられているのです。

ところで、ハ行の音はどういう問題を含んでいるのでしょうか。それは次のようなことです。

(1)もともと、ハ行の音は、現在のような、ハ、

	語頭の「は」		語中の「は」		語尾の「は」	
	表記	発音	表記	発音	表記	発音
1	はな	ファナ	かはら	カファラ	いは	イファ
2	はな	ファナ	かはら	カワラ	いは	イワ
3	はな	ハナ	かわら	カワラ	いわ	イワ

ヒ、フ、ヘ、ホという発音ではなくて、ファ、フィ、フゥ、フェ、フォというように、唇をいったん合わせてからはなすようにして発音していたのです。ですから、花は、ファナ、瓦はカファラ、岩はイファと発音していたことになります。

(2)ところが、ファの発音で唇を合わせる、その合わせ方がだんだん弱くなっていって、ファがワになる傾向が出てきました。それでも単語のはじめに来るファはワにならず、ファのまま残りましたから、花は依然としてファナでありましたが、単語の中ほど、あるいは終わりに来るファは唇の合わせ方が弱くなってワになりましたので、瓦は、カファラでなくなって、カワラとなり、岩はイファでなくなって、イワになってしまったのです。それでも表記は相変わらず、はな、かはら、いはと書いていたので、はの字は、ファ、ワのように読み分けをするようになってしまいました。

(3)その後、もう一度変化が起こってファ、フィ、フゥ、フェ、フォの発音が、現在のようなハ、ヒ、フ、ヘ、ホの発音に変わりました。ファとワならまだ発音の仕方は似ていますが、ハとワでは口の形がまるで違うのです。そこで、このように違う発音を同じはの字を用いて書いているのではどうしても不便だということになって、現在の口語ではワの発音に対する表記をわに変えたわけです。

文語ではそれがもともとの表記になっていますから、ハ行の字を発音する時には、語のはじめに出るハ行の字はハと読み、そして語の中ほどまたは終わりに出てくるハ行の字はワと発音しなければならないのです。文語の動詞には、いまお話ししたハ行、ヤ行、ワ行、ダ行の語尾を持つものがそれぞれあるので、それらについては、口語とは違うのだということをはっきり知っていてもらいたいと思います。

それでは、仮名違いの関係で口語では五段のものが文語では四段になる、ということについて話しましょう。現在口語で「本を読もう」というのを、昔の人の言い方に直すと「本を読まむ」です。ところが、その「む」が次第に発音が

変化して「う」という発音になってしまいました。するとそれに伴って「読ま」の語尾の「ま」にも変化が起こりました。というのは、日本語の音の特性は、子音が一と母音が一とで構成されているものが圧倒的に多いのです。その形が発音としては一番安定した形と感じられているようです。つまり、母音が二つ並ぶことをきらう性質が日本語にはあるようなのです。ところで、先ほどの、「む」が変化して「う」になった場合、「読ま」のmaの母音aと、「う」、つまりuとが隣り合わせに並ぶことになります。これは日本語の発音としては安定した形でないので、更に変化をおこして、別の母音になろうとするわけです。この ma-u の場合には、mō の形になりました。それを現代語では、「読もう」と書いてあるわけです。その他にも、下表に示したような経過をたどって、「咲けり」とか、「赤かり」というような言い方が出てくるのですが、これはまた助動詞や形容詞のところで勉強することになります。

読ま—う	ma-u ⟶ mō	読もう
咲き—あり	ki-a ⟶ ke	咲けり
赤く—あり	ku-a ⟶ ka	赤かり

問 仮名遣いのところで、表記と発音とが違うというお話がありましたが、現代語にもありますね。たとえば**銀座へ行くのへ**は、エと発音しますが、**銀座え行く**とは書きません。それに**本をよむのを**もヲ行のオと同じ発音ですが**本およむ**とは書きません。だから、現代語の表記が発音の通りであるとはいえないと思います。

答 いいところに気がつきましたね。現代語の助詞の**へ**、**を**はそれぞれ昔の表記法を残したものなのです。実はそれだけでなくて、現代語の仮名遣いにも発音通りの表記でないところがあるのですが、これはさしあたり問題にする必要がありませんので、これ以上たち入らないことにしましょう。

問 活用の種類のところで、口語では五段活用と一種類なのに、文語では四種類にもわかれているのはどうしてなのでしょうか。

答 この質問ももっともだと思います。それについては、次のところで説明することにしますが、考え方としては、現代語の五段活用が、古語では四つに分かれている、というより、古語で四つの別の活用をしていた語が、いろいろな経過

によって、一つの形にまとまってきたと考えるほうがいいと思います。とにかく、法則が先にあったのではなくて、いろいろな言葉が先にあったのです。それを整理してみた時に法則が明らかになって来るのです。だから、言葉が時代と共に変わって来れば、整理のしかたも変わって来る。それで前のとは違う法則になるのですね。

〈四段活用〉

「読む」という動詞は口語で活用させると五段に活用します。ところが文語では、さっき話したように、「読もう」という形は、もともと「読まむ」だったわけですから、「も」というオ段の音がなくなってしまうわけです。これを表にしてみると下のようになります。

表をただ見ているだけでなく、下の段に書いてある「読まず、読まむ……」のところを声を出して何度も読んでみなさい。このような言い方を、理屈でおぼえるのでなくて、口がおぼえているようなおぼえ方をすることは、古文になれるという意味で非常に大事なことなのです。

	口語	文語	
未然	読ま・読も	読ま・○	読まず　読まむ　読まば
連用	読み	読み	読みたり　読みき　読みぬ
終止	読む	読む	読む。読むべし　読むまじ
連体	読む	読む	読む時　読むなり　読むごとし
已然	読め	読め	読めども　読めば
命令	読め	読め	読め。読めり

ところで、声に出して読めばすぐ気がつくことですが、未然形に「読まば」という形があり、已然形に「読めば」という、よく似た形があります。これはどう違うのか、と疑問に思うでしょう。これについては活用形の名称の話からし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com